

日本人学生による学習自習室での日本語会話サポートの試み

片山 智子

アブストラクト

日英二言語体制の国際大学で、日本語を学習する留学生への自律学習支援のために開設された自習室での「会話サポート」に注目し、その意義と成果を探った。サポートに当たる日本人学生は、会話のパートナーとしてだけではなく、留学生に対し日本文化を発信するリソースとしての役割も担っている。サポートを利用しているのは、日本語の能力が低く日本人と会話が難しい初級の学生、文法や語彙の知識はあっても日本人との接触機会がない学生、さらに日本人の友人と日本語で会話をする機会はあるが自分の会話力を上げるためには友人以外の支援が必要だと感じている学生であった。日本語のレベルが低くても、積極的に話そうという姿勢の学生は、会話能力が高い傾向にあることが窺えた。また、特に効果的にサポートを利用したのは、自分の課題が何かを考えてテーマや目的を決め、継続して会話サポートを受けている学生であった。サポートを続けることで、日本人学生にも学習者に対する様々な配慮が生まれていることが明らかになった。

キーワード： 自律学習、会話サポート、リソースとしての日本人、接触場面

はじめに

立命館アジア太平洋大学（以下APUとする）では、2008年10月より日本語を学習する留学生のための自習室SALC（Self Access Learning Center）が開設された。APUは国際大学であり、留学生は日英2か国語で学習・生活が可能という特殊な環境で日本語を学んでいる。このような留学生に対し、SALCの果たすべき役割は何だろうか。本報告では、開室時から現在までのSALCでの学習サポートの試みをまとめ、特に日本人学生による会話サポートに焦点を当て、サポートを利用している留学生とサポートに当たる日本人学生が記録したコメントシートと学生へのインタビューから、学習自習室での日本人学生による会話サポートの位置づけと意義を探る。

1. 自律学習を促す支援方法

1.1 セルフアクセス・センター

言語学習とは、教室で教師から「習う」だけで身につくものではない。学習者自身が目的を持って学び、使用する機会を見つけて運用力を身につけることが必要となる。そこで、学生の個別対応型の「チュートリアル」授業や、自主学習をおこなうためのリソースが整えられた「セルフアクセス・センター」を開設し、学生の「自律学習」を支援している機関も少なくない。

「チュートリアル」とは、授業形態の一つである。桜美林大学では日本語の授業の一つとしてチュートリアルを取り入れている（斉藤他 2004）。チュートリアルの時間には、学生は個別に学習を行う。自分のニーズや希望に合った教材や学習方法を学生自身が選び、計画を立て、実行する。教師は支援者として、学生を見守り、時に応じて個別に学習の進捗状況などについてのセッションをおこなうのである。

「セルフアクセス・センター」も、学習者が自らのニーズに基づいて学習目標を設定し、リソースを選択し、どう利用するかを決定するという点でチュートリアルと共通している。センターには、言語学習教材だけでなく映画やテレビ番組など外国語の授業を目的に作られたのではない「生の」リソースも整えられている。教師は言語を教授するかわりに、ファシリテーターあるいはアドバイザーとして、学習者が学習方法の知識を広げることを助け、学習者が必要とする継続的サポートや手引きをおこなう（Murray 2006, 2011）。神田外語大学や国際教養大学では、英語学習者のためのセルフアクセス・センターが開設されており、国際教養大学では、一般市民にも学習の機会を提供している（Murray 2011, 神田外語大ホームページ）。

1.2 立命館アジア太平洋大学のセルフアクセス・センター「SALC」

A P Uでは、2008年秋学期から日本語を学習する留学生のための自習室SALC (Self Access Learning Center) が開設された。筆者は、当初よりSALC日本語コーディネータとして運営にかかわってきた。SALCは、英語学習者対象には2008年春学期から開室されており、同じ部屋を共有する形で日本語学習者に対して提供されることになったという経緯がある。

英語のSALCサポートとしては、言語アドバイザー、ライティング・サポートの英語教員、さらに会話とライティングをサポートする学生TAが、それぞれ一日1~3コマSALCにおいて、学生対応をおこなっていた。筆者は日本語コーディネータを任されていたが、学期中にSALCに常駐する時間はなく、学期開始前の書籍などの購入と配架およびTAを希望する日本人学生に対するサポート・トレーニングが主な仕事であった。学期中は、授業の合間に様子を見に行き、その時に居合わせた留学生の質問に答えたり、TAのつけている記録ノートにコメントやアドバイスを書く程度の介入しかできなかった。つまり、日本語を学んでいる学生が自主的に利用する場ではあるが、自律学習を助ける役割を担う言語アドバイザーはおらず、いわゆる「セルフアクセス・センター」とはかなり形態の違った場所だったと言える。

日本語SALCを開室するに当たり、留学生の実態と照らして考えたコンセプトは次のようなものであった。一つ目は、「日本語は楽しいものだ」と感じられる場にあることである。多くの新入生は日本語ゼロ初級で入学し、最初の学期(初級レベル)は週に95分×12コマの日本語の必修授業を受ける。A P Uには80を超える国籍の学生が在籍しているが、全ての学生が同じ条件で試験を受け単位を取らなければならない、中国や韓国といった国以外から来た学生にとっては、文法・文字の両面で母語とは全く違う言語を学ぶわけで、予習・復習の時間が非常に多く必要になる。さらに、ほぼ一日おきに漢字や文法のクイズがあり、「日本語の勉強は苦く辛いものだ」という印象を持っている学生も少なくないのが実情なのである。

二つ目は、「日本文化に触れる機会を作ること」である。上で述べたように多くの初級学生は一日の大半を日本語学習に使っているにもかかわらず、実際の生活や専門の授業では英語が使われることが多く、日本語を使ってコミュニケーションをおこなう経験はそれほど多くない。また、中級、上級とクラスのレベルが上がるにつれ、授業で学ぶ日本語はアカデミックな内容が中心となる。A P Uは、マネジメント系と社会学系の二つの学部からなっており、日本語上級を終えた学生は、専門授業を日本語で受けることが一つの目的になっているため、授業の内容もそれに対応したものが増える。その結果、上級レベルを終えると、環境問題・経済などアカデミックな分野に関する語彙の知識はあるものの、生活で使われる日常的な語彙を知らない学生や、日本の文化に関する知識が極端に少ない学生がいることが問題視されるようになってきた。

そこで、この2点を満たすため、教室や教科書では学べない「日本」を知る機会を提供し、日本語を使うことは楽しいことなのだ実感できるような動機づけになる場を作りたいと考えた。図書館との棲み分けも考慮し、書籍としては図鑑や、漫画を配架することにした。図鑑は、日本文化や地方に関する情報が文字だけでなく写真や絵で見ることができ、漫画は、ストーリーを追いながら、日常生活の様子や場面・立場での表現の違いを知ることができ、さらにはオノマトベが多用されていることも特徴である。また、海外で翻訳されている物が多いので学生が興味を持って手に取ってくれるのではと考えた。

書籍などのハード面に加え、日本人学生に、日本人との接触場面が少ない留学生に対して日本文化を発信する「生きたリソース」としてのソフト面の役割を担ってもらうことにした。片山・菅(2010)がおこなった初級学習者の日本語接触に関する調査では、学外での日本人との接触は買い物などの単純な情報の交換や継続性のない一時的な接触に限られており、初級学習者が複数の日本人の輪の中で日本語接触を行うことは非常に難しいこと、さらに、日本語接触をうまく活性化できない学習者には、学習者に合ったリソースが見つからないという外的要因と、リソースへの働きかけができないという学習者自身の内的要因があることが指摘されている。また、Browne・Lee(2011)による国際大学(A P U)における日本語学習者の日本語使用に関する調査では、在日期間が1年から3年になる留学生41名のうち、10名

が1ヶ月に一度も教室外で日本語を使用していないケースが報告されており、たとえキャンパス内に日本人と留学生がいっしょにいる環境であっても、実際には国ごとのグループに分かれてしまい、接触場面を持つ機会がほとんどない学生もいるという実態が明らかになっている。このような状況を少しでも変えるきっかけとして、SALCでの会話サポートが役に立つのではないかと考えたわけである。

2. 日本語 SALC の活動の実際

表1は、SALCのための準備や活動内容についてまとめたものである。

表1 SALCに関する活動一覧

	書籍など	学生サポート (TA)	出版物 (SALC通信)	その他	
0	2008 年秋 漫画を集める (古本・寄付)	3名(サポートは無し)			
1	2009 年春 図鑑・事典など 試験問題集 多読用教材 やさしい読み物	日本人学生5名(週7コマ) 会話サポート (学習アドバイス)	6月号 SALCの紹介・TA紹介	教員1名のサポート 開室時間2~5限	
	2009 年秋 参考書 (英語などの訳付)	日本人学生5名(週7コマ) SALCのアピール 会話サポート	10月号 TA紹介・日本文化紹介 12月号 SALC利用者紹介 漢字学習法の紹介	教員1名のサポート 開室時間2~5限	
	2010 年春 新試験のための問題集 参考書(英語等の訳付) 初級用漢字学習シート 多読教材用タスクシー	日本人学生5名(週8コマ) 会話サポート TAのアピール 日本語ボード	4月号 SALCの紹介・TA紹介 6月号 内定を取った先輩の経験談 教員からのアドバイス	開室時間2~5限	
	2010 年秋	日本人学生6名(週7コマ) (全員新しいTAに)	10月号 SALCの紹介・TA紹介 12月号 会話サポート利用者の声 ネットで学べるサイト紹介	開室時間2~5限	
	2	2011 年春 新試験のための問題集 スキル別参考書 (英語等の訳付) 旅行ガイドブックなど	日本人学生7名 (週7~9コマ)	4月号 SALCの紹介・TA紹介 7月号 夏休みに向けて 旅行の紹介 ネットで学べるサイト紹介	コーディネータ 2名に 開室時間2~5限
		2011 年秋	日本人学生6名(週10コマ)	10月号 SALCの紹介・TA紹介 会話サポート利用者の声 1月号 春休みに向けて 町で漢字探し ネットで学べるサイト紹介	BII棟→F棟へ移動 開室7限までに延長

日本語SALCの開室は2008年秋からであったが、実際に日本人学生によるサポートが始まり留学生にSALC利用を呼びかけたのは2009年春からである。何も無いところからの活動であったため、学生のリクエストを聞きながら書籍を増やしていき、学生サポートの内容も、コーディネータとTAが相談をしながら試行錯誤しつつ決めていった。現在の体制がほぼ整ったのは2010年の春学期である。そこで、表1では2009年春から2010年春までを第1期、それ以降を第2期とした。最初の1年間は、書籍購入やジャーナルの発行に関して、日本人教員一人にサポートしてもらった。2010年秋学期からは日本語コーディネータが一人増え、筆者は2011年春からは、主に日本人学生による会話サポートに関するコーディネータをおこなうようになった。

2.1 書籍など

まず、図書館にはないもの、日本文化に接することができるものというコンセプトで、漫画や図鑑、レベル別多読本(CD付)などを揃えた。また、日本語クラスでは日本語能力試験やビジネス日本語能力試験に対応した授業は行われていないため、問題集を購入した。

その後、英語・中国語・韓国語の訳がついたスキル別の参考書を増やすようにし、旅行や料理・ファッションなど生活の中の日本語に触れられるような雑誌も置くようにした。

SALCの特徴は、日本人学生TAによるサポートである。そのため、予算の大部分がTAに支払われ、書籍は主に年度の最後になって残った予算から購入していた。漫画や雑誌などは寄付に頼る部分も多い。書籍や聴覚教材は、まだまだ不足している現状である。

2.2 SALC通信

毎学期2～3回、「SALC通信」が発行されている。これは、英語学習者・日本語学習者の学生にSALC利用や自律学習を促す目的で発行されるA3サイズ4～6ページのジャーナルで、入学式や語学クラスで配布している。約半分のスペースに日本語学習者対象の記事が載っており、この記事の内容に関しては、コーディネータに任されている。記事の内容は、「日本文化」に興味を持たせるようなものとともに、自律学習に役立つ情報として他の学生の体験談を多く取り上げるようにした。例えば、漢字学習の工夫、就活で内定を受けた学生からのアドバイス、旅行の経験などである。さらに、TAに親しみを感じてSALCのサポートを受けに来られるようにと考え、毎学期の初めには写真入りでTAの自己紹介を載せている。

2.3 日本人学生によるサポート

毎日2コマ～3コマ、日本人学部生TAがサポートに入っている。TAには、普段から留学生との接触機会が多く初級学生とも会話経験のある学部生を希望者の中から選び、面接をおこなって決定している。サポートの目的は日本語を教えることではないが、「TA」という名称を使っているため、最初のころは「文法を教えてほしい」、「宿題を手伝ってほしい」と言ってくる留学生が多かった。しかし、日本語教育の専門家ではない学部生のTAがそれに応えることは難しく、うまく対応できないケースが多く見られた。そこで、「教える」のではなく「いっしょに勉強する」というスタンスで学生に接するようにとアドバイスをした。今では、学習が非常に遅れている学生のサポートなど特殊な例を除いて、勉強を「教えてもらいに」来る学生は減っているようである。会話練習がサポートの中心であるが、その他には、発音・アクセントの矯正、発表の練習、レポートの日本語チェックを頼まれることが多いようである。

当初のサポート対象は、初級後半から中級レベルの学生であった。片山・菅(2011)によると、初級学生が日本語を使って話す相手は、同じ語彙・文法力を持つクラスメートが多く、「日本人と話すのは恥ずかしくて勇気が出ない」、「自分から働きかけをしても日本人の話すことが理解できず継続した関係が築けない」というケースが多い。そこで、SALCを、日本人と話す機会がない留学生や日本語で話しかける自信がない留学生に対して、日本人と接触するための橋渡しの場として設定した。日本人と接する第一歩としてTAと話し、日本語で会話する楽しさを知り、日本語を話す自信をつけることが、キャンパスや学外で日本人との接触機会を持つ動機づけになるだろうと考えたわけである。

開室して最初の1年は、留学生の間でのSALCの知名度が低く、利用者も少なかった。そこでTAが中心になり、日本語クラスでSALCに関するアンケートをおこなったり、掲示板にTAの自己紹介を貼ったり、会話サポートのチラシを配ったりと、SALCを知ってもらうための工夫をしていた。SALC内のホワイトボードを使って様々な情報を発信する「日本語ボード」も、TAのアイデアから生まれたものである。その季節の食べ物、祭りの情報や人気のテレビドラマ、漢字の豆知識など、TAが週替わりで書くこのボードは、毎学期引き継がれ、今も続いている。

3. 会話サポート利用の実態

3.1 会話サポートの方法

学生はまず、サポートを受けたい時間を予約する(一人またはペアで1回20分)。会話サポートを受けた場合には、学生もTAも記録用紙を書くことになっている(資料参照)。学生は、まず記録用紙にその日のテーマと目標を記入する。会話が終わると、その日の達成度、コメント、次への課題を記入する。用紙は裏表に合計7回分まとめて記録できるようにした。そうすることで、自分の課題が明確になり、続けることで進歩する様子も実感できるからである。TAの記録用紙も同様に、一人の学生の7回分が1枚に書き込み、初めて対応する学生であってもそれまでの様子や本人の希望などがわかるようになっている。

TAは日本語教育の専門家ではない学部の2年生、3年生なので、SALCのサポートの意図を理解してもらうため、学期の最初にトレーニングを実施している。特に、会話サポートに関して以下のような指示をしている。

【会話サポートで気をつけること】

* 公的な場での日本語の使い方を学生に知ってもらう。

・ TAは名字を名乗り、丁寧語で話す。

* 「話す」ことを目的にする。

- ・文法や発音の間違いを直すことが目的ではない。間違いに気づいても、発話をさえぎったりせず、気づいたことは後からコメント・アドバイスする。
- ・できるだけ一つのトピックで、会話を続ける。
- ・相手から発話を引き出せるような質問をしていく。(yes/ no だけで答えられるような質問だけが続けないように。どうして? どうやって? たとえば? と話を広げる)
- ・日本語がなかなか口から出ない学生がいても、辛抱強く待つ。
- ・聞くだけではなく、TAからも発信する(自分の経験・考え・日本の生活習慣について)

「公的な場の日本語」とは、「です・ます」を使った表現や、相手の名字を「さん」づけで呼ぶことである。学生が最初に学ぶ動詞のフォームが「ます形」であるために、この表現で話す初級の早い時期から会話ができるということもあるが、中級以上の学生に対しては、くだけた表現と改まった表現の使い分けを意識させる必要があると思われるからである。APUの留学生が実生活で日本人と話すのは、ほとんどがカジュアルな場面であり、相手もくだけた日本語を使って話してくる。上級レベルになっても改まった場面で話すという経験がほとんどない学生も多く、教員に対しても授業のプレゼンテーションなどでも「です・ます」を使わない(使えない)学生も見られる。そのため「SALC」という場面では丁寧な言葉遣いをするように決め、場面や相手に合わせて言葉を変えることに気づかせ、それを意識して使う機会を与えようと考えたのである。

3.2 利用者から見た会話サポート

日本語会話サポートの利用者記録から、2011年春学期・秋学期、それぞれ13週間の開室期間にサポートを利用した学生数と回数をまとめた(表2)。春学期と秋学期の利用者数を比べると、62名から145名に増え、利用回数も多くなっている。これは、SALCの場所が、キャンパスの端にある校舎から、キャンパスの中心に近い図書館の前に移動したこと、以下に述べる二人の学生に対するインタビュー記事が載った「SALC通信」2011年10月号を、初級から上級までのクラスで配布したことなどが影響していると考えられる。また、会話が苦手な学生に対して、教員からの働きかけもあったようである。しかし、繰り返しサポートを利用する学生も増えており、教員に促された後も自発的に来るようになった学生も少なくないようである。

表2 会話サポートの利用者(2011年度)

	春学期	秋学期
1回	34名	69名
2回~4回	22名	71名
5回~9回	1名	9名
10回~14回	2名	2名
15回~20回	0名	0名
20回~	2名	1名
合計人数	61名	152名

秋学期の利用者を国別にみると、16カ国の学生が利用していたが、中国人学生(43名)とベトナム人学生(39名)の利用が目立った。中国人は4技能の中で「話す」と「聞く」技能が伸びない学生が多い。ベトナム人は、発音面で会話力が劣る学生も多くみられる。それを教師に指摘され、あるいは、自分でこの弱点を克服したいと考えた学生がSALCを利用しているのだろう。また、中国人学生とベトナム人学生の傾向として、学生寮を出たあとも同じ国の学生が集まって家を借り、共同生活をしているケースが多く、教室以外に日本語を使用する機会がない学生がこのサポートを利

用していると考えられる。これに対して、留学生中、人数では第2位を占める韓国人の利用者はそれほど多くなく15名で、利用回数も1〜2回と少なかった。TAのコメントもほとんどが「先生に勧められてきたようだが、話したいことは話せている」と書かれていた。筆者が担当するクラスでも、韓国人は他の国の学生に比べて日本人の友人が多く、接触機会が多い様子が窺えた。そのため、韓国人学生は発音などに問題はあっても、日本人と話すことに困難を感じておらず、このサポートの必要性を感じていないのだと考えられる。

春学期に20回以上会話サポートを利用していた2名は、中級レベル(入学後2学期目)の学生であった。以下に、二人の学生へのインタビューの内容をまとめ、学生がどのように会話サポートを利用し、どう感じているかについて見ていきたい。

学生Aは中国出身の女性、学生Bはノルウェー出身の男性である。表3からもわかるように、二人の教室外の日本語環境や会話サポートの利用目的、利用方法には異なった特徴がみられた。

表3 会話サポートの利用

	学生A(女・中国)	学生B(男・ノルウェー)
実生活での日本語使用	サポート利用開始時(入学後半年・第2学期開始時)には、日本人の友人は少なく、実際に日本語で会話をする機会はほとんどなかった。その後、日本人の友人ができたが、まだ日本語で話す機会は少ない。サークル活動もしているが、あまり日本語を話す必要がない	日本人の学生は、自分と話すとき英語を使いたがる人が多い。日本語で話す日本人の友人はいない。今学期になって、さらに増えた。
サポートの使用頻度	週4回	週2〜3回
利用の目的	知識はあるが、それを実際に使う練習・流暢に話す練習をするために利用。	日本人の友人と会話をするときに、話したい内容はたくさんあるが、語彙が少なくて言いたいことが言えない。そのため、実際の場でコミュニケーションをする前の練習の場として利用。
利用の仕方	「日本の観光地」「タメロ」など興味を持った内容をテーマにした。TAと一緒に小学生向けの本を読みながら、その内容に関係がある話題で会話をした。実生活の中でも、郵便局などへ行く用事があるときには、TAとその場面の会話を練習してから行くようにした。	自分が見たドラマや漫画の内容をTAに話した。また、1週間毎にテーマ(兵役の経験や中国で英語を教えた経験など)を一つ決め、それについて3回話してみた(1回目はわからない表現を教えてもらう。2回目は、その言葉を使ってみる。3回話すと、その言葉が身につく)。
自分にとっての効果	TAと二人だけで会話をするので、恥ずかしがらずに話すことができる。SALCで練習した後で、実際の場に出ると、自信を持って話すことができる。TAの経験を聞くことで、日本人の生活に関することなども知ることができた。	数えきれないくらい言葉を覚えた。自分で辞書を見ていると、たくさん同じような言葉が並んでいて、どれを使ったらいいのかわからないが、TAはその時に一番適した言葉を選んで、教えてくれた。日本人の生活や文化なども知ることができた。

学生Aは、初級レベルの早い時期からSALCに本を読みに来ており、中級前半で中上級向けの多読本を読破するという積極的な学習態度を持つ学生である、しかし、会話サポートは「恥ずかしい」と言う理由で、中級レベルが始まるまで一度も利用していなかった。実生活でも日本人と日本語を話す環境は非常に少なく、SALCでTAと話すことが、学生Aにとって日本語使用の重要な機会となったことがわかる。Aは、自分は語彙などの言語知識は持っているがそれをうまく使えないという自覚をもっていた。そこで、日常生活に関係があるテーマを毎回決めて話したり、子供向けの本をTAと一緒に読みながらその内容を利用して会話を膨らませていくなど、会話をするための話題を考えて、TAとの会話に臨んでいたようである。

学生Bは、初級後半から会話サポートを利用している。この学生は、積極的に人と話す性格で、日本人の友人も多いうようだった。つまり、SALC以外にも日本語を話す機会をもっている学生である。しかし、実際の生活で思いどおりに話したいことを伝えられない自分をもどかしく思い、それを克服するために、TAの助けを借りに来ていた。辞書では適切な語彙の選択や表現のしかたまで学ぶことができないが、TAなら質問するとすぐに適切な言葉を選んでく

れる。同じテーマを3回繰り返して話す方法を取っていたが、TAは毎回違う学生なので、常に初めての話題としてリアルな会話が経験もできるところも良かったようである。

二人に共通することは、どちらも自分の目的に合わせてサポートをどう活用するかを自分で考え、目的を明確にして来ていたということである。コメント用紙の記録からも、「知っている言葉が思い出せないで、少しずつ話せるようにしたい」、「思っていることをはっきり表現したい」、「トピックの内容が深いと、表現するのも難しくなる」、「たくさん役に立つ言葉を覚えることができた」等、客観的に自分を観察しサポートの効果も実感している様子が窺える。

また、「恥ずかしくない」「自信が持てる」というのも二人が強調していたことである。SALCでは、TAが自分だけに向き合っ、時間を使ってくれることが安心感を与えるようである。「SALCは安全な場所で、リラックスして話すことができます。TAさんはいつもいろいろな学生と話していますから、どんなに変な日本語を使っても、下手でも、恥ずかしくないんです。」これは、日本人と話す機会が多い学生Bの言葉である。日本人との接触場面が多い学生でも、このような感想を持っているということは、初級レベルの学生や日本人との接触する機会の少ない学生にとって、日本人と日本語で会話することが如何にハードルの高いことであるかを物語っているだろう。

さらに、このサポートでは、トピックについて学生が話すだけでなく、TAからもわからないことを質問したり、TA自身の経験や知識を話したりするようにしている。二人もインタビューで、TAを通して日本人や日本文化を知ることができるのが会話サポートの魅力であると述べていた。

3.2 サポートをする側から

次に、日本人TAの視点から「会話サポート」を見るために、2011年度秋学期の終了前にTAに対するインタビューを行った。6名のTAのうち4名がインタビューに応じてくれた。内訳は、初めてTAをした学生が2名、2学期目と3学期目がそれぞれ1名である。2名は、留学生と日本人学生が日本語で交流するサークルを運営している学生と、留学生寮でレジデンス・アシスタントをしている学生で、日常的にもサポートする立場で留学生と接していた。

インタビューは、まず自分が感じていることを連想して書き出してもらった。その際の指示は、話すときに気をつけていること、日本人や留学生の立場になってみて感じる日本語の特徴や難しさ、留学生の様子などについて、自分が考えたこと・気づいたことを短くできるだけたくさん書くようにというものであった。その後、書いた言葉を分類してそれについて説明をしてもらい、筆者がさらに質問をして詳しく聞いていくという方法を取った。インタビューの答えを分析し、「気をつけていること」「気づいたこと」の2点について以下の5項目に分類した。

【気をつけていること】

自分の発話で気をつけていること

- ・簡単な文・単語で話す。
- ・文が長くならないように、内容を分けて話す。
- ・あいまい表現を使わない。
- ・文末まで省略せずに話す。
- ・主語を省略しない。
- ・会話が進まないときは、まず「私は・・・」と自分の話題を出す。
- ・方言・関西のアクセントを出さずに話すようにする。

相手の発話を受ける場合に気をつけていること

- ・相手の話したいことが口に出てくるまで、待つ。
- ・相手ががんばって使おうとしている文法があったら、こちらもその文法を使って話すようにする。
- ・相手の話が分かりにくいときは、同じ内容を正しい文にして繰り返してあげる。
- ・相手の言いたいことがまとまらないときは、こちらから、段階を踏んで少しずつ質問していく。
- ・相手が「はいはい」と言っても本当に理解しているか確認するため、例文を作ってもらおう。
- ・難しい話題でも「あなたの国は」、「あなたなら」と聞いてみると答えが出てくる。

説明するときに気をつけていること

- ・例を出す。学生にも例を作ってもらおう。
- ・どんな場面で使うか、だれが使う言葉かを説明する。
- ・いっしょに辞書や図鑑で調べてみる。
- ・ジェスチャーを使う。
- ・わからないことは「私もわからない」と言う。

【気づいたこと】

利用者の特徴

- ・日本語レベルの違いよりもチャレンジしているかどうかで会話力に差が出る。よく話せる初級レベルの学生もいれば、ほとんど話せない上級レベルの学生もいる。
- ・シャイな性格の学生でも、続けて来ている。
- ・日本語を勉強し始めて2、3ヶ月の新入生
……外の日本人と話す能力はまだないが、日本人と関わりを持ちたいと思っている学生。
日本人と話せたことに喜び、学習意欲につながっている様子。
- ・話すことが苦手な中級・上級学生
……下手なのが気になり、日本人との友人とは英語で話している学生。非常にゆっくり話すので、TAでも理解するのが大変な学生もいる。
読み書きはできるが、発話ができない学生（国で日本語を勉強してきた中国人が多い）
初級文法だけで話しても相手に通じるのでそれで満足している学生（使用する語彙は上級レベル、TAの日本語もすべて理解できる）。
- ・がんばって話す中級学生
……自分でチャレンジをして、新しい文法や語彙を使おうとしている。
- ・話すことがそれほど苦手ではない中級・上級学生
……会話をする日本人の友人はいるが、話が通じるので、間違いを直してもらえない。
寮に住んでいない新入生なので、日本人の知り合いができない。
同国人同士で家を借りて住んでいるので、日本語も英語も使う機会がない。

留学生にとってのSALCの良さ

- ・20分間自分だけのためにTAが話してくれること（友人にはそこまで要求できない）。
- ・ひとつの話題をじっくり話せること（実際の会話はすぐに話題が変わるので、ついていけない）。
- ・敬語や丁寧語で話す機会が持てる。
- ・先生とは話にくい身近な話（恋愛観など）をしながら会話練習ができる。

インタビューから、TAが、留学生にとっての日本語の難しさ（語彙の難しさ・複文や重文などで文が長くなる・主語や文末が省略される・長音やアクセントなど発音の問題・相手によって表現を変える必要がある等々）を考慮して、細やかな配慮をしながらサポートをおこなっていることがわかった。学生のレベルにも気を配り、どのように話したら相手にわかりやすいか、相手から発話を引き出すためにどう会話を進めるかを意識してサポートをしている。TAをする前と比べて、SALC以外の接触場面で自分の態度や話し方が変わったかどうか聞いたところ、3人のTAが「話す相手によって、短い文でゆっくり話したり、普通に方言も交えて使ったり、ことばを使い分けようになった」「他の日本人学生が、日本語が上手ではない学生に対して、長々としゃべるのを見ると、『それじゃわからない』と思って、言い直してあげることがある」と、実際の場面でも配慮ができるようになったと答えた。TAの経験が長い学生やSALC以外でも留学生をサポートする立場にある学生は、特に留学生の困難を理解し、工夫しているようであった。

また、教室では発話が極端に少ない学生がTAとは積極的に話していたり、内気な学生が継続してサポートを受けていたり、学生が教室で教師に見せる姿と、同じ学生同士という立場のTAに見せる学生の姿が違うことも窺えた。あるTAが「私が知らないことがあると、上手ではない学生もそれについて一生懸命話そうとする」と言っていた。わからないことは学生から教えてもらい、日本の古い文化についても図鑑で調べながらいっしょに知っていくというTAの姿勢も、SALCの特徴だろう。教師との会話では、「日本語の練習」になってしまうが、SALCの会話サポートでは、留学生と日本人学生が感じていることについて話し合ったり国の文化や習慣についての情報を交換したりすることで、言語と同時に内容にも注目した「真のコミュニケーション」をおこなうことができ、それが留学生にとって会話サポートの魅力になっているようである。

会話のトピックは授業で取り上げたものが中心であったが、それ以外に、アルバイトの面接や電話のかけ方を練習したり、ATMの使い方を質問されて実際にATMまで行ってみたりと、実生活の中でのサポートも求められていた。「よく来る学生から、SALCの外でも敬語で話しかけられるようになりました。」と、TAと留学生には友人とは違う新しい形の関係が生まれているようである。

さらに、当初は対象に考えていなかったような、すでに日本人の友人がいて日本語での会話機会が多い学生も、会話サポートを利用していった。実際の会話場面では、情報や気持ちのやり取りが成功すればコミュニケーションは成功し、その後で日本人が留学生の日本語の間違いを指摘することはない。以前筆者が教えた上級レベルのクラスにも「友達と話しても日本語が上手にならない」と相談に来る学生がいたが、そのような学生が「的確な日本語が使えるように」「もっとスラスラ日本語が話せるように」と自分なりの目標を持って、積極的にこのサポートを利用していったようである。

インタビューをしていて印象的だったことは、TAがみな、「サポートを通して、会話力を伸ばすのは知識ではなくチャレンジする態度だということ気付き、それが自分自身の語学の勉強にも影響を与えた」と述べていたことである。「日本語のレベルの違いよりも、チャレンジしているかどうかで会話力に差が出る。」「初級レベルでもチャレンジしようとする学生は、会話力が伸びる」「習った文法や新しく覚えた言葉を使おうとする姿勢が語学力を伸ばすと気づいた」。インタビューの途中で何度もこのようなことが聞かれた。

このように、会話サポートはTA自身にも、様々な影響を与えている。「いろいろな国の友人ができた」「国によっても違うが、それよりも人によって違うことを知った」など、異文化理解を深める様子や、「傾聴力がついた」「チャレンジしている様子を見て、刺激になった」「言語は、勉強して知識があっても、使わなければ上手にならないことがわかった」と自分自身の成長につながる気づきが述べられた。そして、「学生が上手になっていくのを見るのが励みになる」「感謝されることがうれしい」という答えから、留学生・TAの双方が会話サポートを楽しみながら活用している様子が観察された。

4. まとめ

APUの留学生は、日英2か国語で学習・生活が可能という特殊な環境で日本語を学んでいるため、教室で学習している日本語が生活での言語使用に結びつかないケースが多い。初級レベルの学生のみならず上級レベルの学生でも、実生活での日本語の接触場面が非常に少なく、「日本語を使う楽しさを経験する機会」や「日本文化に触れる機会」が限られている。そこで、教室や教科書では学べない「日本」を知る機会を提供し、日本語を使うことは楽しいことだと実感できるような動機づけの場として、SALC (Self-Access Learning Center) の日本語サポートがおこなわれている。サポートの中心は日本人学部生による会話サポートである。日本人学生はサポートを希望する留学生の会話のパートナーとなり、同時に、日本文化を発信する「生きたリソース」としての役割も果たしている。

会話サポートを利用する学生は、買い物などの単純な情報の交換はできても日本語力の不足から自由な会話は成立せず日本人との継続した関係が築けない初級レベルの学生や、日本語の能力はある程度あっても生活の中で日本人との接触機会がない学生であった。さらに、日本人との接触機会が多い上級レベルの学生も、実生活では日本語が間違ってもコミュニケーションは成立するために、間違いを直してもらえないという理由で、このサポートを利用していった。会話サポートは、全てのレベルの学生に有用であると言えるだろう。

特に効果的にサポートを利用していたのは、自分にとって何が必要かを自覚し目標設定をして、サポートを継続して利用している学生や、日本語のレベルにかかわらず習った文法や覚えた言葉を使って話したい内容を相手に伝えようとする積極的な姿勢で会話をする学生であった。

サポートを行う日本人学生は、留学生の日本語レベルにも気を配り、どのように話したら相手にわかりやすいか、相手から発話を引き出すためにどう会話を進めるかを意識してサポートをしていた。サポートを続ける中で、「会話力を伸ばすのは知識ではなくチャレンジする態度だということ気付き、それが自分自身の語学の勉強にも影響を与えた」と、日本人学生自身の成長につながっている様子も観察された。

さらに、SALCでは、留学生が教室とは違うパフォーマンスを見せていることも明らかになった。APUのSALCでは、教師ではなく学部生がサポートに当たるため、学習に関するアドバイスはできない。その代わりに、学生同士という立場で自分の生活や感じていることについて話し合ったり国の文化や習慣についての情報を交換したりすることで、留学生にとっては、毎回のサポートが、単なる「言語の練習」ではなく内容に注目した「真のコミュニケーション」をしているという実感を伴うものになっていたと考えられる。

しかし、現在のサポート体制には、問題点も多い。今回は、留学生サポートの経験を積んだTAが多く、留学生の様子をよく観察して効果的なサポートをしていることが明らかになった、しかし、インタビューの中で、「間違いをどこまでどうやって訂正すればいいのかいつも迷う」「無意識に使っている日本語について質問され戸惑った」「発音がおかしいことはわかっても、その矯正の仕方がわからない」といった問題点も多く出された。現在、APUのSALCには日本語の言語アドバイザーがおらず、日本人学部生だけがサポートに当たっているが、学生だけのサポートには限界があると言わざるを得ないだろう。今後、学生の自律学習を支援するために、言語アドバイザーによるサポートと学生サポートの二つが両輪となって、SALCが運営されるようになることが望まれる。

参考文献

- 片山智子・菅智穂 (2011) 「日本語初級学習者の接触場面に関する実態調査」『ポリグロシア第19巻』pp. 79-89
- 斉藤伸子・松下達彦 (2004) 「自律学習を基盤としたチュートリアル授業—学部留学生対象の日本語クラスにおける実—」『Obirin Today 4』p19-34
- 浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子 (2006) 「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』国立国語研究所
- 藤田裕子 (2010) 「「チュートリアル」の経験を積んだ教師の実践的知識」『桜美林言語教育論集第6号』桜美林大学言語教育研究所 p. 63-75
- Browne, Kelvin C. and Lee, Richard A. (2011) 「Context and Contract: the impact of a Japanese international university environment on Japanese use outside the classroom」『ポリグロシア第20巻』pp. 5-13
- Murray, Garold (2006) 『自主言語学習 Independent language Learning』塩野直子訳 国際教養大学
- Murray, Garold (2011) 「セルフアクセス言語学習 構造とコントロールと責任」『シリーズ言語学と言語教育 第23巻 学習者オートノミー』松下達彦訳 ひつじ書房 p. 123-145

参考サイト

神田外語大学ホームページ (SALCに関して) : <http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/salc/>

資料 会話サポート記録用紙

TA 用

____回目 ____年 ____月 ____日 ____限 TA _____

トピック・テーマ: _____

良かったところ◎ ○ これから頑張ろう (全部ではなく、気づいたところにマーク)

今日の目標がはっきりしている () ✓			
話したいことが表現できる	内容 ()	語彙力 ()	言葉の選び方・表現力 ()
話し方	発音 ()	正確さ ()	流暢さ ()

コメント (引き継ぎ)

学生用

date: 2011 . ____ . ____ TA さんの名前 _____

トピック・テーマ (Topic・Theme): _____

きょうの目標 もくひょう Today's objective: _____

もくひょう たっせいど 目標の達成度 achievement : _____ %

コメント (comment/ the point you need to work on next)